

# 『 120分 de 法華経! 』

vol.11 Feb.2025

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

## 『妙法蓮華経 授記品第六』 (迹門・正宗分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん  
者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行))

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得  
たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、  
りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



### <授記品のあらすじ>

【魔訶迦葉(まかしょう/頭陀第一 長老魔訶迦葉)への授記】——

【一四三頁一行】仏が全ての人に「平等」に教えを注ぐということを「偈(げ)・詩」によって説いた後、世尊は聴聞(ちよん)の大衆に向かって仰(おお)せになりました。

【一四三頁一行】「私の弟子である魔訶迦葉(まかしょう)は、これから先、未来世において三百万億というはかり知れない数多くの仏に会い、帰依と感謝のまことを捧げ、心の底から仏を敬い、讃嘆して、偉大なる仏の教えを世に弘めて行きます。【(偈)一四四頁七行】『佛の智慧の爲に淨(きよ)く梵行(ぼんぎょう)を修せん』 仏の智慧を求めて清浄なる菩薩行を実践し、つまり八正道や六波羅蜜などの菩薩行を完璧に実践し、ついには「仏に成る」ことができるであります。その仏の名

は『光明こみょう如来』と言ひ、国の名は『光徳こうとく』、時代は『大莊嚴だいじょうごん』と言ひます。そして仏の寿命は十二小劫(しょうこう) という大変長い期間であり、その仏が滅度したのちも教えは二十小劫の長きにわたって正しく残っていきます。さらに教えが形だけでも残る期間は、その後の二十小劫の長い期間にわたります」

【一四三頁終三行】「その『光徳』という国はどのような国かと言ひますと、／『國界(こっかい) 嚴飾(ごんじき) して、諸(もろもろ) の穢惡(えあく)・瓦礫(がりやく)・荊棘(きょうこく)・便利の不淨なく、其(そ) の土(ど) 平正(びやうじやう) にして、高下(こうげ)・坑坎(きやうかん)・堆阜(たいふ) あることなけん』 国土は大変美しく、汚(か) れはなく、石や砂利などが散乱していません。人間の排泄物は綺麗に処理されて不淨な所は一切無く、土地の地形は平らで凹凸(おとつ) がありません。穴はしっかりと埋められて平坦です。／『瑠璃(るり) を地と爲(な) して寶樹(ほうじゆ) 行列し、黄金を繩と爲(な) して以て道の側(ほとり) を界(さか) い』 道は宝石の瑠璃(るり) でしっかりと舗装され、立派な街路樹が立ち並び、道の境(さかい) は黄金の繩で縁取(ふちど) られています。美しい花が天から降って国土全体が美しく彩(いろど) られ、空気は清く芳(かぐわ) しい香りで充満しています」

【一四四頁一行】「その国では、仏の教えを實踐し、教えを説き弘める者が無数にいます。教えを求め、学ぶ人々も数多くいます。迷いを除き尽くし、眞の仏弟子である声聞たちもはかり知れないほどたくさんおり、菩薩も数えきれません。【(偈)一四四頁終行】『諸(もろもろ) の菩薩衆稱計(しょうけい) すべてからず其(こ) の心調柔(こころじやうにゅう) にして大神通に達(およ) び諸佛の大乗經典を奉持(ぶじ) せん』 その無数の菩薩たちの一人ひとりの心は、円満で柔和です。しかも大神通力を具えており、大乘の教えを護持しています。／『魔事(まじ) あることなけん。魔及(まおよ) び魔民(まみん) ありと雖(いえど) も皆(みな) 佛法を護(まも) らん』 そして、『魔・魔民』は存在しているのですが、しかし『魔事』はありません。この国ではその魔・魔民が、むしろ『仏法を護(まも) る大きな力』となっています。迦葉が仏と成る国の様子は、以上のように大変素晴らしい国です」

【感激した大目犍連(だいもくけんれん)・須菩提(しゆぼだい)・摩訶迦旃延(まかかせんねん)らが受記を願う】——

【一四五頁六行】 世尊が迦葉に対して具体的な『成仏の保証・記』を授けられたことを目(ま) の当たりにした大目犍連(だいもくけんれん)・須菩提(しゆぼだい)・摩訶迦旃延(まかかせんねん)は、感激に身を震わせながら一心に合掌し、世尊をじっと仰ぎ見つづけました。

【(偈)一四五頁終四行】そして声をそろえて『偈(げ)』を唱え、次のように申し上げました。

「『大雄猛世尊(だいおうみょうせそん)』 大いなる勇氣を持ち、全ての迷いを打ち払われた世尊よ。どうぞ私どもをあわれと思(おほ) し召(め) してお言葉をください。／『若(も) し我が深心(じんしん) を知(しる) しめして』 私どもの心の奥深きところまでをお見通し頂き、私どもの決意もお察し頂くならば、『おまえも仏に成れるぞ』と『成仏の保証』をどうぞお授けください。そのお言葉を頂くことができれば、私どもは甘露(かんろ) が注がれて全身の熱が取れるように、すがすがしい心持ちになることができるものと存じます」

【大目犍連・須菩提・摩訶迦旃延らの現在の心境 — 授記を希(ねが)う】——

【『大王の膳(ぜん)の警(けい)え』】

【(偈)一四五頁終二行】 「私どもの現在の心境をたとえて申し上げるならば、飢(う) えで苦しむ国か

ら逃れて来て、いきなり大王のもとで見たこともない豪華なご馳走(ちそう)の前にいるようなものです。大王が『食事をしなさい』とおっしゃらないと、そのご馳走を食べて良いのかわからず、オドオドするだけで手を出すことなどできません。ところが大王がひとこと『食事をしてよろしい』とおっしゃってくだされば、喜んで安心して食事をすることができます。私たちもこれと同じようなものでございます」——— **【『大王の膳(ぜん)の警え』】**

【(偽)一四六頁一行】**大目犍連(たいもけんれん)**たちは続けます。「私どもはこの『大王の膳(ぜん)』の前にいる飢えた者と同じです。／『毎(つね)に小乗の過(とが)を惟(おも)うて當(まさ)に云何(いかに)して佛の無上慧を得(う)べきを知らず』私どもは自分だけが迷いや悩みの苦から離れることができれば、それで良いということが間違いであったことに気づきました。ただ、全ての人を平等に見る『**仏の智慧**』が最上だということは分かりましたが、しかし、どのようにすれば、この尊い『**仏の智慧**』を得ることができるのか、まだ分かっていません。／『佛の音聲(おんじょう)の我等作佛せんと言(のたま)うを聞くと雖(いえど)も心尚(こころな)お憂懼(うく)を懷(いだ)くこと未(いま)だ敢(あえ)て便(すなわ)ち食(じき)せざるが如し』私ども声聞も、いつかは仏に成れるということとを伺いながらも、まだ『**仏の智慧**』を悟っていない私が本当に仏に成れるのか、正直申し上げ心配です。それはちょうど先のたとえ話のように、大王のご馳走が目前にありながら、食べることができない者(自信のない者)の心境と同じであります」

【(偽)一四六頁四行】「もし仏さまから、『お前も仏に成れる』とひとこと頂けるならば、私どもは安心を得て精進することができます。／『願わくは我等(われら)に記(き)を賜え 飢(う)えて教(おしえ)を須(ま)って食(じき)するが如くならん』どうか私どもにも『**成仏の保証**』をお授けください。大王の膳を前にした者が食事を頂けたように、安心して菩薩道に励み、世のため人のために一生懸命に尽くすことができます。どうぞお願い申し上げます」

### 【須菩提(しゆびだい)ノ解空第一(げくうだいいち)須菩提(しゆびだい)への授記】——

【一四六頁七行】それをお聞きになった**世尊**は、これら大弟子たちの願いを受け、さらには心の奥底をお見通しになり、**比丘**たちに次のようにお告げになりました。

「諸々の比丘たちよ。今こそ告げましょう。私の大弟子である**須菩提(しゆびだい)**はこれから先、三百万億那由他(なむた)という数多くの仏に出会い、帰依と感謝のまことを捧げ、心の底から仏を敬い、讃嘆し、／『常に梵行(ぼんぎょう)を修し菩薩の道(どう)を具して』常に正しい行いをして菩薩道を実践して、そして最後には「**仏に成る**」ということを保証しましょう。仏としての三十二の徳相をそなえ、その姿は美しい宝の山に譬えることができます。仏の名は『**名相(みょうそう)如来**』と言います。時代は『**有宝(いうほう)**』、国は『**宝生(ほうじょう)**』と名づけられます。その国の美しさは他にくらべることができないほど素晴らしく、その国の景色を見れば誰もが心が清まり、有難く、満ち足りた気持ちになって行きます。国土は平坦で、一面に頗黎(はり)という綺麗なガラスが敷(し)きつめられています。大地に凹凸(おうとつ)はなく、砂ぼこり、小石や砂利、いばらの荒野もありません。人間の排泄物は綺麗に処理されて不浄な所はなく、地上は花々に覆(おお)われて、あらゆる所が美しく清らかであります」

【一四七頁一行】「その『**宝生(ほうじょう)**』の国の人びとは、／『其の土の人民皆寶臺(ほうだい) 珍妙(ちんみよ)」

[じ\)の樓閣\(ろうかく\)に處\(しよ\)せん』](#) 皆、高層の立派な建物に住み、豊かな生活を送り、仏の教えを学ぶ弟子たちと仏の教えを説き弘める人たちがガンジス河の砂の数ほど無数にいます。

『[名相\(みやうさう\)如来](#)』の寿命は十二小劫(しょうこう)という大変長い期間であり、その仏が滅度したのちも教えは二十小劫の長きにわたって正しく残ります。さらには教えが形だけでも残る期間は、その後二十小劫の長い期間にわたります」

【一四七頁五行】『[名相如来](#)』は常に虚空に満ち満ちており、無数の人々を教化するでしょう。仏の教えのもとには、素晴らしい機根を具えた菩薩たちがたくさん集まり、この国はそうした[尊い菩薩](#)たちが充満しているために、[光り輝いて美しく彩\(いろ\)どられています](#)。また、『[天眼通\(てんげんつう\)](#)』、『[宿明通\(しゅくみやうつう\)](#)』、『[漏尽通\(りゅうじんつう\)](#)』などをはじめとする六つの神通力や、八つの解脱の修行を身につけた素晴らしい声聞たちも無数にいます」

### 【[大迦旃延\(たいかせんねん\)](#)/論議第一(ろんぎだいいち)摩訶迦旃延(まかかせんねん)への授記】——

【一四八頁終五行】すると[世尊](#)は、[比丘](#)たちに向けて、次のようにお告げになりました。

「そなたたちに告げておきます。ここにいる[大迦旃延\(たいかせんねん\)](#)は、これから先、八千億という数えきれないほどの仏に帰依と感謝のまことを捧げ、心の底から篤(あつ)く敬い讃嘆し、それらの仏がお亡くなりになると、高さが千由旬(せん ゆじゆん)、縦と横が五百由旬という巨大な塔を建てて、未永く仏の徳を讃えます。その塔は[金・銀・瑠璃\(るり\)・碑磔\(しゃく\)・瑪瑙\(めのう\)・真珠・珊瑚\(さんご\)・玫瑰\(まいえ\)](#)という七つの宝『[七宝\(しちほう\)](#)』によって作られています。そして美しい花々を捧げ、香を手塗りに塗り、香を仏像に散じ、仏前で香を焚(た)き、絹の天蓋(てんがい)や幟旗(のぼりばた)を立てて供養します」

【一四八頁終行】「それからのち、さらに二万億というはかり知れない数多くの仏を同じように供養し、/[『菩薩の道\(どう\)を具して』](#)そして[菩薩道を完全に行\(おこ\)なって](#)、ついには「[仏に成る](#)」ことができるでしょう。仏の名は『[閻浮那提金光\(えんぶなたいこんこう\)如来](#)』と言ひ、その国土は平坦で、一面に頗黎(はり)という美しいガラスが敷(し)きつめられています。宝のようにキラキラと輝く木々が立ち並び、道の両側は黄金で縁(ふち)取られ、言葉では表現できないほど美しい花々が大地を覆(おお)っています。/[『周徧\(しゅうへん\)清淨\(しょうじょう\)にして、見る者歡喜せん』](#)そうした国土の風景を目にすると、全ての者たちは、みな心が清浄になり、歡喜に満ちます。そこには地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道などという[四惡趣\(しあくしゆ\)](#)の者はおらず、天上界・人間界の者たちばかりです。そして数多くの菩薩や声聞たちが国中に充満し、国土を莊嚴にしています。さらには無数の衆生に仏の悟りを開かしめ、十方の人々から尊敬と供養される身となります。このように輝かしい光明で国中を照らす『[閻浮那提金光\(えんぶなたいこんこう\)如来](#)』は、十二小劫(しょうこう)という大変長い寿命を持ち、その仏が滅度したのちも教えは二十小劫の長きにわたって正しく残ります。さらには教えが形だけでも残る期間は、その後、二十小劫の長い期間にわたります」

### 【[大目犍連\(たいもくけんれん\)](#)/神通第一(しんつうだいいち)目連(もくれん)への授記】——

【一五〇頁五行】つぎに[世尊](#)は人々に向かってお告げになりました。

「そなたたちに告げておきます。私の弟子である[大目犍連\(たいもくけんれん\)](#)は、これから先、八千



(一千万億) という数えきれないほどの仏に対して我が身を捨てて供養し、仏の智慧を求めて帰依と感謝のまことを捧げます。【(偈)一五頁終五行】『常に梵行(ぼんぎょう)を修し』そして常に菩薩道を修し、いつまでも仏の教えを身に保って護持して行きます。さらにそれらの仏がお亡くなりになると、高さが千由旬(せん ゆじゆん)、縦と横が五百由旬という巨大な塔を建てて、未永く仏の徳を讃えます。その塔は金・銀や瑠璃(るり)・碑磔(しゃく)・瑪瑙(めう)・真珠・珊瑚(さんご)・玫瑰(まいえ)という七つの宝『七宝(しちぼ)』によって作られています。そして美しい花々を捧げ、香を手塗りに、香を仏像に散じ、仏前で香を焚(た)き、絹の天蓋(てんがい)や幟旗(のぼりばた)を立てて供養します」

【一五〇頁終四行】「さらに二百万億というはかり知れない数多くの仏を同じように供養し、そして菩薩道を完全に行(おこ)なって、ついには「仏に成る」ことを保証しましょう。仏の名は『多摩羅跋栴檀香(たまらばせんたんにこう)如来』と言い、時代は『喜満(きまん)』、国は『意楽(いらく)』と名づけられます。その国土は平坦で、一面に頗黎(はり)という美しいガラスが敷(し)きつめられています。宝のようにキラキラと輝く木々が立ち並び、真珠のような美しい花々が大地を覆(おお)い、／『周徧(しゆへん)清浄(しょうじょう)にして、見る者歡喜(くわんぎ)せん』そうした美しい風景を目にすると、全ての者たちは、みな心が清浄になり、歡喜に満ちます。天上界・人間界に人々がたくさん住んでいます。そして、ガンジス河の砂の数ほど無数の声聞(しやもん)がいます。その声聞(しやもん)たちは、心の迷いを去って『天眼通(てんげんつう)』、『宿明通(しゆくみょうつう)』、『漏尽通(ろうじんつう)』などをはじめとする六つの神通力を持ち、多くの人々を心服させる素晴らしい徳を具えています。／『菩薩無数(むしゅう)にして志固く精進(しやうじん)し佛の智慧(びやくち)に於て皆退轉(たいてん)せじ』また菩薩も無数におり、仏の智慧を求め心が固く、精進(しやうじん)が滞(とどこ)り、怠(おこた)ることなどありません。そして仏の寿命は、二十四小劫(しょうごう)という大変長い期間であり、その仏が滅度したのちも教えは四十小劫の長きにわたって正しく残ります。さらには教えが所(た)けでも残る期間は、その後四十小劫の長い期間にわたります」

#### 【四大声聞以外への数多くの弟子たちについて、これから授記を約束】——

【(偈)一五二頁三行】「私の弟子にはこうした素晴らしい徳分を具えている者が五百人(無数)います。その者たちにも記(き)を授けましょう。その者たちは未来世において悉(ことごと)く『仏に成る』ことができるでしょう」

【(偈)一五二頁終二行】「そなたたちは、この世において初めて私の教えを聞いたものだと思っているかも知れませんが、じつはそうではなく、前世からの因縁によるものであり、みんなは前世において悉(ことごと)く私の弟子でありました。そして未来においても私の弟子であります。／『宿世(しゆくせ)の因縁(いんえん) 吾(われ)今當(いまま)に説くべし 汝等(なんだち)善(よ)く聽(き)け』そうした『因縁』について、これから(次の『化城論品』で)説き聞かせます。皆さん。しっかりと聞くのです」



## 法華経は授記の経

(P157・1行/P117・1行)

〈授記〉というのは、「あなたは確かに仏の境地に達することができる」という保証(記荊・きべつ)を、仏さまから授けられることです。

法華経には、この授記ということがたくさん出て来ます。～ 授記とは、ある特定のすぐれたお弟子たちについて、その成仏を保証なさることのように考えられがちです。ところが、そうではありません。《五百弟子受記品第八》や《授学無学人記品第九》まで読み進んでゆきますと、五百人とか、二千人とか、とにかく無数の人々が授記され、さらに、《提婆達多品第十二》に至っては、悪人の提婆達多や、わずか八歳の竜女までが成仏を認められています。

そこで法華経は授記経であるという人もあります。～ 法華経は一切衆生に授記されるお経であります。

## 授記の本意と受けとりかた

(P159・終4行/P118・終2行)

ここで深く心しなければならぬことがあります。それは「何もしなくても仏になれる」という安易な保証ではないということです。～

第一に、お釈迦さまはいつの場合でも「あなたは仏である」とはおっしゃらないで、「あなたも仏になれる」とおっしゃっています。～ 誰にでも「あなたはすでに仏なのだよ」とおっしゃったのでは、大きな誤解を起こす人が多いのです。凡夫はそれを安易に受け取って、迷いだらけの自分そのままが仏なのかと思いがたり、何もしないで仏になれると考えたりしがちです。

そこでかならず「今後こういう行ないを続ければ・・・」という条件が付けられるのです。すなわち、記荊(きべつ)は仏道の『卒業証書』ではなくて『大学入学許可書』です。～ だから、今後なお一層修行し、努力していかなければならないのです。

### 《患惟のひととき ①》

お釈迦さまは、「あなたは仏である」とはおっしゃらないで、「あなたも仏になれる」とおっしゃっています。～ 「あなたはすでに仏なのだよ」とおっしゃったのでは、大きな誤解を起こす人が多いのです。～ 何もしないで仏になれると考えたりしがちです。授記とは単なる予言ではなくて、あくまでも『保証』なのです。と庭野開祖は説きます。

— この説示を、あなたはどのように受け止めますか？ 深めてみましょう。

## 授記の本意と受けとりかた (つぎ)

(P162・2行/P120・9行)

第二は、記荊(きべつ)を得て自己満足に終わらせてはなりません。「仏になれる」ということを自分だけの喜びとせず、最終的に「世の中の全ての人々を幸福にする」という受け止め方をすることが大切なのです。

第三に、なぜ「名指し」を仏さまにさせていただいて「お前は確かに仏に成れる」と言ってもらいたいのか。～「力」のもとである「感激」はどこから湧いてくるのでしょうか？感激は理屈から湧いてくるものではありません。「魂と魂の触れ合い」からこそ湧くのです。偉大な人格に触れ、その「尊いことば」を魂に聞くことが出来た時、我々の胸は燃え上がるのです。よし！命を投げ出しても「この道ひと筋」に生きよう！という烈々（れつれつ）たる決定（けつじょう）が生じるのです。迹仏（しゃくぶつ）であるお釈迦さまの偉大さはここにあります。～ 仰ぎ慕（した）ってやまないお釈迦さまの「ことば」として伺った時、単なる「理解」を超えた大きな力となって、我々を立ち上がらせるのです。～ 〈信〉という字は、ご覧のようにイ（にんべん）に言（ことば）と書きます。このことにも示されているように、ことばというものは、信を作るうえにはなくてはならぬものなのです。

### 「<sup>げしんぎょう</sup>解信行」の真の信仰は、力がある

(P164・2行/P121・終行)

「理解」したことが心の感激となって、初めて「信」が生まれます。「信」が生まれると、ひとりだけでそれを、世のため人のために押し広げて行かねばならなくなります。「理解」したことが「信」となり、それが「人のため世のために尽くす行動」へと展開して行って、はじめて「信仰」と言えるのです。真の信仰には「力」があります。

※（「行」⇒「信」⇒「解」も大切だが…）「解」⇒「信」⇒「行」の真の信仰には「力」がある。

### ことばの<sup>ちから</sup>力

(P166・4行/P123・6行)

ことばというものはそれほど大事なものなので、日本では昔から『言霊（ことたま）』という言葉の方がされてきました。つまり、ことばそれ自体に生命（いのち）があるように表現したものです。～ 心のなかで思う言葉が「精神」となり、「思想」となり、「信」となって、「自分」を作り、自分を動かします。同様に、声として発する「言葉」は「人をつくり」「人を動かします。人を「生かしも、殺しも」します。

※ ことばの力（『妙音菩薩品第二十四』）（第8巻P480・2行/P366・1行）

仏教では、「ことば」というものをひじょうに尊重しています。～（ある行動を起こすときに、「ことば」にして考え行動を起こします）。〈ことばが人間をつくった〉ということもできるわけです。～我々が心の中に何かを考える時は、必ず「ことば」で考えます。ことば無しには、何も考えることはできません。～妙音菩薩というお方に、なぜ「妙音」という名が付けられたかということ深く考えてみますと、「美しい音声」というのは「真理のことば」という意味でなければならぬことが判ってきます。

### 《<sup>しんぞう</sup>信性のひととき ②》

庭野開祖は、「心のなかで思う言葉が『精神』となり、それが『思想・信』となって、『自分』を作り、自分を動かします。同様に声として発する『言葉』は人を作り、人を動かし、『生かしも、殺しも』します」と説いています。

—— それでは日ごろの自分の言葉は、「人を生かして」いますか？ それとも「殺して」いますか？ どういう言葉を使っているか？ どういう言葉が多いか？ 振り返ってみましょう。

## 如来の十号

(P169・6行/P125・終行)

①如来(にょらい)真理の体現者 / ②応供(おうぐ)供養の対象者、尊敬に値する(尊敬されるに相応しい人) / ③正偏知(しょうへんち)智慧が全てに行きわたり(自分自身のみならず、人々に対しても智慧を行き渡らせることができる) / ④明行足(みょうぎょうそく)智慧と実践の両面を備え(言行一致) / ⑤善逝(ぜんぜい)悪事をせず、善事を行い、迷いから離れ(常に善行を実践) / ⑥世間解(せけんげ)世間の成り立ちが判り、様々な境遇の違いを見分ける力を持ち(世の中や相手のことをよく知り) / ⑦無上士(むじょうし)この上ない完全な人格を備え / ⑧調御丈夫(じょうごじょうぶ)自身の内外の魔に打ち勝ち、どんな人をも自由に教え導くことができ / ⑨天人師(てんにんし)天上界・人間界の大導師(世の多くの人々を導くリーダー) / ⑩仏・世尊(ぶつ せそん)最高の真理を悟り、この世で最も尊い存在。(安穩で円満、生々澁刺とした人生を歩む完成者)

### 《思惟のひととき ③》

この「如来の十号」は、私たちにとっては遠く及ばない「徳目」のように感じますが、しかしその「十号」の一つひとつは、私たちが目指したい徳目でもあります。

前回の『薬草論品』の《思惟のひととき ③》で、この「如来の十号」のうちの「応供・おぐ」「調御丈夫・じょうごじょうぶ」についての学びを深めましたが、あらためてこの「如来の十号」をを振り返ってみると・・・

私はどの徳目を「身につけたい!」か? またはどの徳目を「目指したい!」か? どの徳目に「憧(あこが)れを持つか? かみしめてみましょう。

※「授記」とは、以上の「如来の十号」を具えた人に成れることの保証。

## 正法・像法・末法

(P172・2行/P127・終行)

〈正法〉 仏の教法が正しく行われ、教・行・証がそろっている時代

〈像法〉 教えと行が形式で残るが、教と行があって、証のない時代

〈末法〉 教えだけが残り人々が見失い、行と証が失われた時代

	教	行	証
正法	○	○	○
像法	○△	△	×
末法	△	×	×

## 魔・魔事

(P174・終2行/P130・4行)

『魔事あることなけん。魔及び魔民ありと雖も皆佛法を護らん』

(一四四頁 二行)

「魔」というのは、正しい道の邪魔をするものすべてを、ひっくるめてこう呼びます。「魔民」というのは、その家来たちです。

この「魔」というものにはふた通りあります。

第一は『身内(しんない)の魔』であって、われわれの潜在意識に巣くっている迷いの集積や、正しい心をかき乱そうとする衝動や邪(よこしま)な思いです。

第二は『身外(しんがい)の魔』であって、外部から加えられる誘惑・圧力・非難・妨害・脅迫(外圧)な



どです。ところが、〈悪に強きは善にも強い〉。という言葉もあるように、～ こういう人たちがガラリと変わって、その強い力を仏法の守護に用いるようになるのです。

⇒ そうして、仏法を学ぶことによって、『身内(しんない)の魔』を打ち払い、また、仏法を広めることによって、『身外(しんがい)の魔』を教化して、〈魔事〉をなくし、かえって「魔」や「魔民」をプラスの力に変えるように努めなければならないのです。

仏の教えを「正しく信じ」、「正しく実践」していけば、必ず〈魔事〉はなくなります。

⇒ これが本当の「魔事なし」、「まじない」なのです。

### ぼうりよく しやうぼう 暴力には正法をもって

(P178・終5行/P132・終6行)

魔に打ち勝つものは「正法」しかないのです。「正法の光」を心に射し込ませれば、魔はたちまちに消えてしまいます。闇の中に光が射し込めば、闇はたちまち消滅するのと同様です。

### しゆい 《息惟のひととき ④》

現在の私にある『身内(しんない)・身外(しんがい)の魔』について考えてみましょう。

つまり、自分の精進を妨(さまた)げようとする「迷いや邪(よこしま)な心」が出てはこないか？ また、外部からやって来る「誘惑」などはなかったか？ そして、そうした「魔」が「魔事」となることはなかったか。振り返ってみましょう。

### じやうにゆう 調柔な心

(P184・終3行/P138・1行)

『其(そ)の心(こころ)調柔(じやうにゆう)にして大神通(だいじんつう)に逮(およ)び』 (一四四頁 終行)

調(じょう)というのは、心がよくととのっていること。～ すべての点においてすぐれ、円満にバランスがとれていることです。柔(にゅう)というのは、やさしくてやわらかなこと。すなわち慈悲と寛容をかねそなえていて、人あたりがたいへん柔和(にゅうわ)なことです。～ 仏道をひろめるうえにも、実生活上で衆(しゅう)をひきいていくうえにも、じゅうぶん心すべきことでもあります。

### しゆい 《息惟のひととき ⑤》

仏道をひろめ、実生活上で人々を導いていくうえで、「調(じょう)・心がととのい、円満でバランスがとれている」、「柔(にゅう)・慈悲と寛容、人あたりがたいへん柔和(にゅうわ)」であることが大切だ、と庭野開祖は説きます。

これは仏道をひろめる「導き」や「手どり」だけではなく、日ごろ、人に何かを教えたり、何かを伝えていく時にも大切な心の在り方であると言えます。

— この調柔(じょうにゅう)な心と、現在の私の心の姿勢と比較してどうか？  
振り返ってみましょう。

## 我が深心を知ろしめして

(P187・1行/P140・1行)

『若し我が深心を知しめして 授記せられば 甘露を以て 灑ぐに 熱を除いて 清涼を得  
るが如くならん』 (一四五頁 終三行)

もし、私どもが心の奥底で決定(けつじょう)していますことをお察くださり、『おまえも仏に成れるぞ』と『成仏の保証』をお授けくださるならば、そのお言葉を頂くことができるならば、私どもは甘露(かんろ)が注がれて全身の熱が取れ、すがすがしく満ち足りた心持ちになれます。どうかお願い申し上げます。

## 大王の膳の譬え

(P190・6行/P143・1行)

『願わくは我等に記を賜え 飢えて 教を須って 食するが如くならん』 (一四六頁 五行)

絶対の信頼を捧げているお釈迦さまから、個人的に「お前は大丈夫だよ」と言って頂けば、それで自身が固まるわけです。よし！ という決定(けつじょう)が生ずるのです。  
—— ことばの力の偉大さです。

## 修行の三要素

(P199・6行/P149・終5行)

くりかえすことは、感銘を深くすることです。しかも 〈心を込めて〉くりかえせば、その感銘はますます深くなります。(この《撰品》での授記の様子もそうです。美しい国土の光景、象徴される人間社会の理想のすがたが、何べんも何べんも繰り返されることで、心の奥に深く深く浸み通していくのを感じられるでしょう。/「以下同文」とは言われな  
い) ～ 結論として、修行というものは、1.「よいことを」、2.「心をこめて」、3.「繰り返す」。この三要素がそろわなければ、よい結果はあらわれません。

## 《思惟のひととき ⑥》

修行の三要素は1.「よいことを」、2.「心をこめて」、3.「繰り返す」であると、庭野開祖は説きます。

—— そこで私の「信仰姿勢」を振り返ってみると、この修行の「三要素」というものを、自らの「信仰姿勢」として心がけているか？ 振り返ってみましょう。

授記で、成仏のためには（魔訶迦葉・まかかしょう／須菩提・しゆびだい／摩訶迦旃延・まかかせんねん／大目犍連・だいもつけんれん）

【摩訶迦葉】 『淨（きよ）く梵行（ぼんぎょう）を修せん～最後身（さいごしん）に於て』 （一四四頁 七行）

【須菩提】 『常に梵行を修し菩薩の道を具して、最後身に於て』 （一四六頁 終四行）

【摩訶迦旃延】 『菩薩の道を具して』 （一四九頁 二行）

【大目犍連】 『漸漸（ぜんぜん）に菩薩の道を具足し已（おわ）って』 （一五一頁 終三行）

とあるように、『菩薩道』を實踐してそののち『成仏する』の保証が説かれています。

## 《息惺のひととき ⑦》

四大声聞に「授記」されていることを詳しく見ると、そのいずれもが・・・  
『菩薩道』を實踐したのちに『成仏する』（完全圓滿な人生を送る）保証が説かれています。  
— このことを、あなたはどのように受け止めますか？ 深めてみましょう。

『四惡道の地獄・餓鬼・畜生・阿修羅道なく、多く天・人あらん』 （一四九頁 六行）

「憤怒」（ふんぬ／地獄）・「貪欲」（とんよく／餓鬼）・「無智」（むち⇒目先の事ばかりとらわれて追い回す／畜生）・「利己」（りじ／修羅）  
という四つの惡徳（『四惡道』）が圧倒的な勢力を持つことなく、人の心はおおむね平正（びょうじょう）  
であるか、あるいは常に歡喜に満ちている明るい世界です。

⇒ これは、凡夫が過去に積んできた業の善惡の程度によって生まれ変わっていく世界を指す  
場合と、人間の心のなかの状態を説かれた場合と、二通りありますが、ここでは後者をさして  
いるとみるべきでしょう。 （P212・3行／P160・終5行）

## 《息惺のひととき ⑧》

『四惡道の地獄・餓鬼・畜生・阿修羅道なく』で、《憤怒（ふんぬ）・貪欲（とんよく）・無智（むち⇒目  
先の事ばかりとらわれて追い回す）・利己（りじ）という四つの惡徳》の世界（人生・日常の日々）、またはその  
心・精神の状態ではなく、心はおおむね平正（びょうじょう）、あるいは常に歡喜に満ちている明る  
い世界（人生・日常の日々）の大切さを、庭野開祖は説きます。  
— では、どうしたらそのような平正（びょうじょう）な状態（人生・日常の日々）になれるのでし  
ょうか。また、そのためには何か必要でしょうか。 考えてみましょう。

※ どうすれば六道の輪廻（りんね）を解脱（げだつ）することができるのかといえば、よい教えを聞き、心を清らかにし、  
行いを正しくするほかはありません。そうして、正しい修行を続けていけば、六道からすっかり離れきつ  
た仏界に生ずることができるのです。そのことを（出離・しゅつり）といいます。

（第1巻 『説法品』 P241・終3行／P172・4行）

※ 『一には諸佛に護念（ごねん）せらるることを爲、二には諸（もろもろ）の徳本（とくほん）を植え、三には正定  
聚（しょうじょうじゅ）に入（い）り、四には一切衆生を救うの心を發（おこ）せるなり』 — 『四法成就』  
（『普賢菩薩勸発品』 三八三頁 一行）

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑨》

四大声聞らが授記された仏国土の『瑠璃を地と爲して寶樹行列し、黄金を繩と爲して以て道の側を界い』や『周徧して清浄ならん。其の土の人民皆寶臺珍妙の樓閣に處せん』という様子は、地面にアスファルトが敷かれていて土砂で汚れず、美しい街路樹が並び、夜は街灯で明るく照らされて、道はガードレールで保護され、町全体に不浄な汚れは無く、高層ビル群も建ち並び現代社会の様相を見る思いです。

この授記で示されている「仏国土」と「現代社会」との違いは一体何でしょうか？  
考えてみましょう。

## しゆくせ いんねん 宿世の因縁

(P222・終3行/P170・2行)

『<sup>しゆくせ いんねん われいままき と</sup>宿世の因縁 吾今當に説くべし <sup>なんだちよ き</sup>汝等善く聽け』

(一五二頁 五行)

世尊は現世における修行を励まし、未来世における成仏を確信させるために、「過去世の因縁を聞かせてあげよう」となさるのです。それが次の『化城諭品』です。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のふいかえり まとめ》

今日の『授記品』の学びを通して、何を学び取ったか？

(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌